

状景を紡ぐ

Koiwa Kanaami Co., Ltd. & Waseda University Nobuaki Furuya+Yuri Fujii Laboratory

00. BACKGROUND

佐渡金山から大間港まで、金の採掘から発展していった相川町では、400年に亘る先人たちの営み、鉱山技術や生産システムの変遷など、歴史的価値の高い貴重な遺産群が多く残されている。

特に、大島高任らによる佐渡金山の開発によって、近代化したかつての風景を今も尚、感じることができる。歴史的に佐渡島と本土をつなぐ玄関口であった大間港は、芸術祭において佐渡島を訪れる人と佐渡島の人との接点になりうる場所と考えられる。



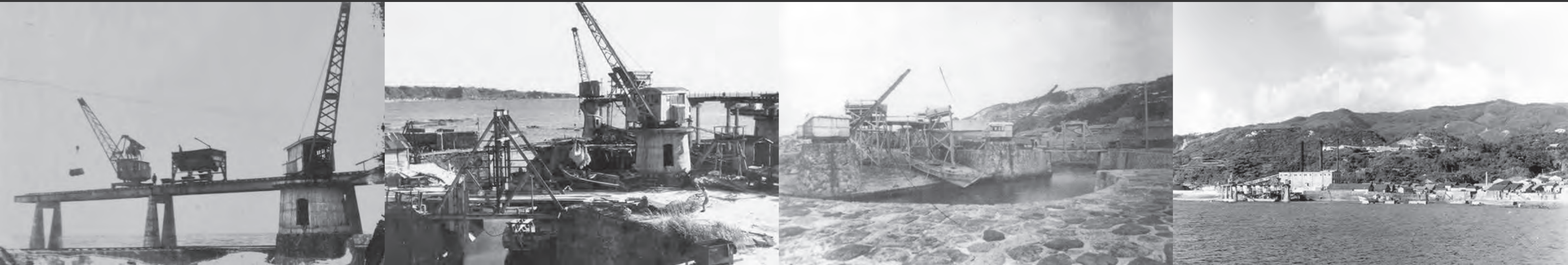
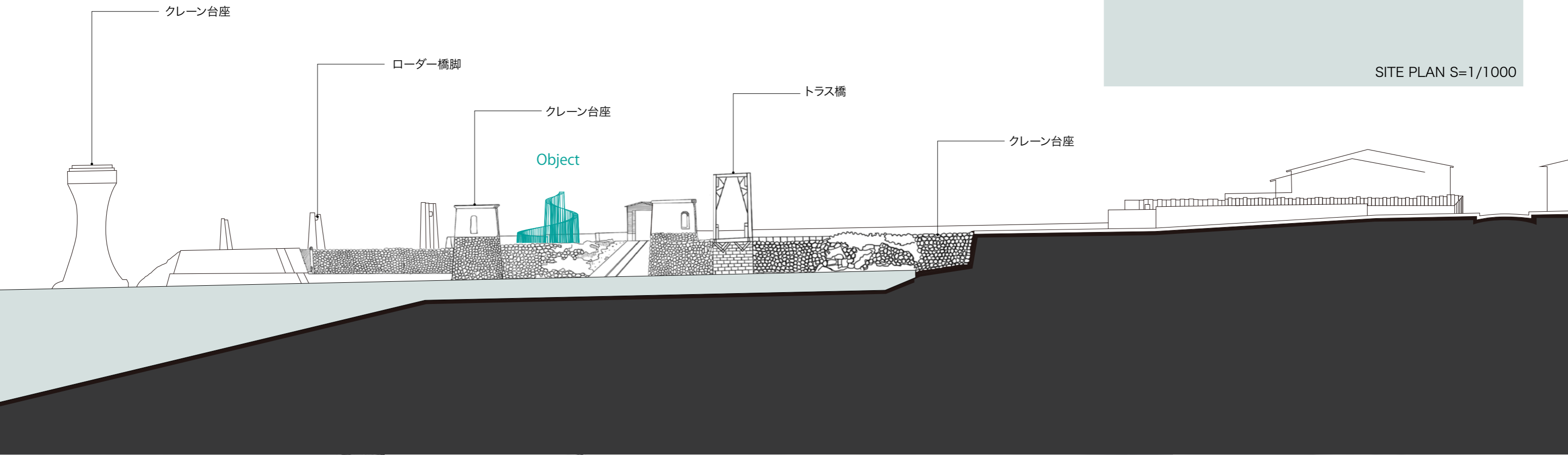
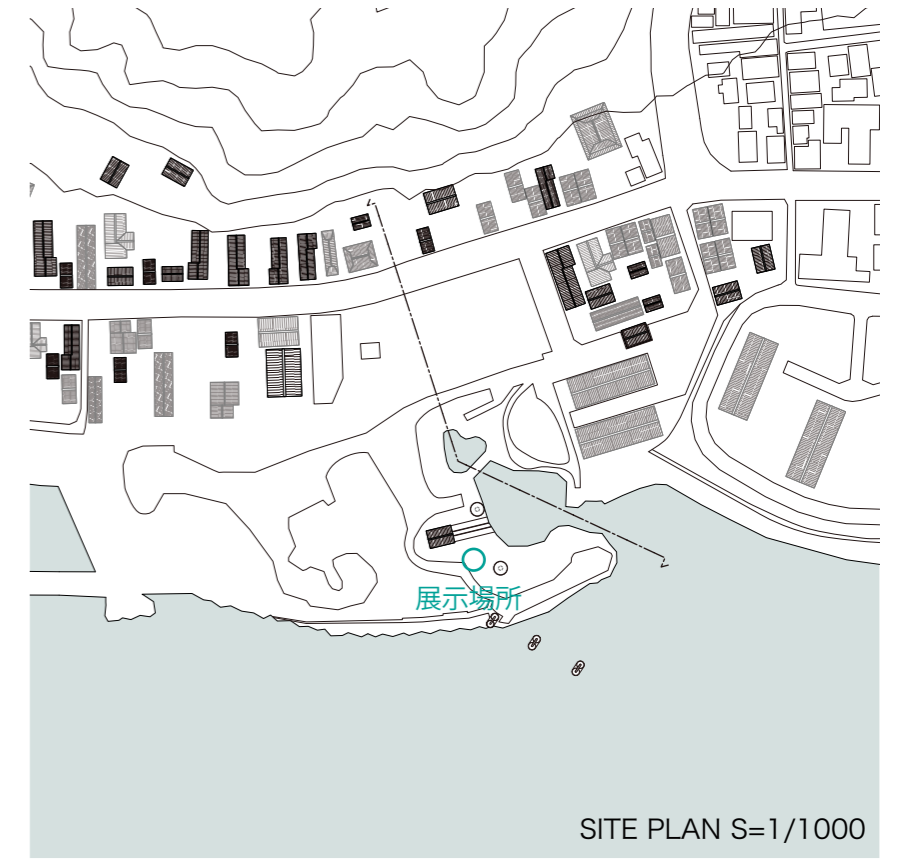
01. SITE

大間港は、鉱山の資材搬入が行われ、現在においてはその近代産業の遺構が残るサイトスペシフィックな場所である。

一方で、鉱山資材を運んでいたレールや資材を持ち上げるクレーンがなく、金山までの生産システムを繋げていた部分が欠けてしまったと見ることができる。

そこで、

鉱山の生産システムや佐渡金山の歴史的な繋がりを想起させるオブジェクトを考える。



02. CONCEPT

鉱山の生産システムや佐渡金山の歴史的な繋がりを想起させるアート作品

大間港にかつて存在し生産システムを繋げていたレール、佐渡金山のフルエット、それら2つを繋げるように佐渡金山で使われていた揚水機のイメージから螺旋状のオブジェクトを提案する。

このオブジェクトがあることで、大間港に残る遺構すべてが一つの作品と見えることを想定する。

訪れる人は大間港の風景を眺め、その歴史的な繋がりを想像する。



Concept Diagram

螺旋状

佐渡金山に用いられた揚水機のイメージ



2重

佐渡金山を象徴する2つの重なりイメージ



レール状

資材をは運ぶレールのイメージ

